



2025年（令和7年）
5月号（No. 960）

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

本会34番目の支部として 新たに「東京支部」が誕生

東京支部長 飯田邦幸

去る4月16日、34番目の支部として「東京支部」が誕生した。戦後すぐには存在していた東京支部だが、首都圏会員たちの「止まり木」として、会員へのサービスや受け皿となるべき組織を復活させることができた。支部設立の趣旨や経緯、その利点などについて飯田新支部長に綴ってもらった。目指すは「みんなの東京支部」

なぜ東京支部が必要なのか

2025年4月16日、新たに「東京支部」が誕生したことを報告します。

首都圏には千葉支部や埼玉支部、神奈川支部、東京多摩支部がありますが、ご承知のとおり23区に支部はありませんでした。首都圏には会員が1503名（2024年3月現在。準会員を含む）います

が、半分以上の835名がどこの支部にも所属していません。

山仲間をつくり充実したクラブライフを楽しむためには、そのための「場」が必要ですが、本部には首都圏会員に向けた共益的な事業はなく、また、本部にある委員会・同好会が会員を受け入れるキャパシティは少なくなる傾向にあります。既存の会員の方々はもとより、新入会員の受け皿としての「場」に

目次

本会34番目の支部として 新たに「東京支部」が誕生	1
フィリピン・ミンドロ島とミンダナオ島 未踏の沢登りに挑む	4
第13回小島鳥水祭が開催される	7
第15回登山教室指導者養成講習会を 小諸・安藤百福センターで開催	8
山の名著再読	10
「体力確認ハイキング」を 丹沢山地南部の高松山で実施	12
新入会員	13
東西南北	14
活動報告 緑爽会	15
会務報告	17
ルーム日誌	17
会員異動	18
INFORMATION	18
図書紹介	19
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月～金 10～20時
第1、第3、第5土曜日 10～18時
第2、第4土曜日 閉室

はなり得ていないのが現状です。ここ数年の入・退会者を見ると無所属会員の退会が非常に多くなっていますが、その一因でもあると考えられます。

一方、東京には多摩地区をエリアとする東京多摩支部（支部員294名）があり、活発な活動が行なわれていますが、東京全体をテリトリーとして支部活動を運営することは困難な状況です。

ついては、前述の支部に加入されていない会員に「場」を提供して退会に歯止めを掛けるとともに、多大な人口を抱える都心の利点を活かして、本会の最重要課題である会員増を図ることができる東京23区内に、新たに支部を設ける

ことにしました。したがって、東京都では、東京多摩支部と東京支部の2支部になります。
支部設立によって、都会の登山



安藤隆生事務局長



飯田邦幸支部長



4月16日、市ヶ谷・JICA地球ひろばで開かれた支部総会の記念写真

東京支部の設立趣旨と本会の理念に賛同する会員とともに、自由闊達で充実したクラブライフをおくれる時代に適応した斬新な支部づくりを目指し、東京支部を新たなステージとして日本山岳会全体の活性化につなげていきたいと考えます。

かつて存在した「東京支部」

『日本山岳会百年史』の「日本山岳会支部設立の歩み」によると、終戦の翌々年、1947年4月19日に東京支部が設立されています。同時に設立されたのが「東京都山岳会」で、松方三郎氏が東京支部長と東京都山岳会

長を兼任しました。国体(国民体育大会、現・国民スポーツ大会)登山の東京都予選大会を主管・開催していましたが、55年に東京都山岳会との併称を廃止して、東京支部は国体から身を引きました。一方、東京都山岳会は発展的に解散して「東京都山岳連盟」となりました。

67年4月22日、支部創立後20年を経過して、その目的を達したとして旧東京支部は解散、以後は「三

水会」として首都圏の会員を中心に活動していました。ちなみに、第3水曜日に会議があるので「三水会」の名称が付いたのですが、近年、定期開催が第3水曜日の夜から昼間に移行しています。

奇しくも、新しく設立された東京支部の毎月の会議は、第3水曜日の夜に開催することになりました。

支部設立までの経緯

2021年6月の日本山岳会の総会で、東京多摩支部の野口いづみ支部長から「会員減少対策として、会員が集まって語り合えるような(止まり木)が必要ではないか。人口の多い東京の都市部に集まれる場所や仕組みが必要だ」というの提案がありました。

それを受けて、東京多摩支部、千葉支部、埼玉支部、神奈川支部の近隣支部長会議を開催、同時に本部の支部事業委員会を2回開催するなどして、具体的な検討に入りました。

同年11月には会長、副会長、理事が当時の松田宏也・千葉支部長が所有する房総550に集まり、坂井広志副会長を座長に1泊2日で

会議を開き、支部設立の具体的な準備に入りました。

これ以降、東京支部設立プロジェクトとして、松田理事を中心に支部設立の委員が決まり、毎月、会議が開かれました。そこでは様々な議論や提案がなされていきます。まず検討したのは、「首都圏の現状」として、東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県、東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県の会員の総数と、その中で東京多摩支部、埼玉支部、千葉支部、神奈川支部への所属人数はもちろん、委員会や同好会への参加状況などから、どのくらいの人数が「止まり木」を必要としているのか、でした。

次いで、「首都圏登山者の特徴」が話し合われました。そのうえで「首都圏登山者のニーズ」は何かを具体的に挙げながら、支部設立の計画を進めていきました。そして、24年は準備期間として、25年4月を目標に設立するスケジュールが決まりました。

支部設立による利点

首都圏の会員サービスや受け皿として、東京支部設立プロジェクトが考えた設立の利点は、以下の5つです。

愛好家への安全登山の啓発や健康増進、ストレスからの解放、山仲間とのコミュニケーションなど、多面にわたってニーズを捉え、本会での豊かなクラブライフを提供することが可能になると考えられます。さらに、都市に暮らす人々の環境意識の高さや情報収集能力は本会の公益的な活動に資するものであり、本会の今後の躍進に大いに寄与するものと期待しております。

(1)本部はこれまで全国を対象にして活動してきましたが、東京支部として別組織にすることで、首都圏を対象にした「支部活動」をすることが出来ます。たとえば、公益事業では障がい者支援事業や講習会などの充実が図れます。もう一つの公益事業では山行や講演会などの充実も図れます。

(2)「止まり木」「受け皿」として、会員の退会を減少させることに力を注ぐことが出来ます。

(3)新入会員の入会動機になりやすい。

(4)若者(青年会員)、高齢者など、対象を絞った受け皿をつくりやすい。

(5)首都圏の会員にアットホーム的な対応が可能になります。その結果、帰属意識が高まることが考えられます。

創立スタッフの力が結集

準備期間の24年の春から本部理事や委員会の協力を得て、初級者向けの登山講習会を毎月、机上1回、実技1回のペースで始めました。それと併せて創立スタッフの声掛けを開始、秋には10人近くのスタッフが集まりました。集まっ

たスタッフを中心に設立準備懇親山行を月1回実施、首都圏の会員に呼び掛けました。

第1回は12月に三浦アルプス、第2回が25年1月に奥多摩・日ノ出山、第3回が2月に筑波山、第4回が3月に湯河原の幕山・城山、第5回が4月に西丹沢・ミツバ岳と山行を積み重ね、参加した会員を東京支部への入会につなげていきました。

ちなみに、4月16日の支部総会で東京支部が誕生した記念山行として、その週末の19日に「東京十名山」(御留山、志村城山、道灌山、飛鳥山、箱根山、西郷山、池田山、島津山、御殿山、愛宕山)山行を実施しました。

これらの講習会や懇親山行と並行して、①設立趣意書、②設立地域の決定、③発起人名簿、④会員同意書、⑤支部規約、⑥役員名簿、⑦事業計画、⑧予算書、⑨業務管理リストなどの作成を行いました。さらに、入会の呼び掛けや入会会のフォーマットづくり、会員同士の連絡用のメーリング・リストとデータ収納のルールづくりなど、様々なことを実行していきました。

3月11日に東京・市ヶ谷のJICA地球ひろばで、入会者向けの事前説明会が行なわれました。翌月の4月16日、同じ会場で第1回の支部総会が開催され、①支部規約、②支部役員、③年間計画、④年間予算の全てが賛成多数で承認されました。ここに東京支部が誕生したのです。

「みんなの東京支部」へ

東京支部の最大の特徴は、支部規約の第8条にある「本支部の運営は支部員全員で行う」にあります。自分がやりたいことを自らが提案して、先頭に立ってやるという

ことです。言うなれば、主役は「自分」だということです。

今までのような支部長を中心とした支部の幹部が運営するやり方に対して、支部員全員で運営するという「みんなの東京支部」のやり方がうまくいくかどうかは、今後、全支部のみなさんに報告していきたいと思っています。

首都圏はもちろん、全国の支部や委員会とも連携しながら、日本山岳会のスケール・メリットを十分に活かすような運営をしていきたいと思っています。

今後の東京支部にご期待ください。



第4回懇親山行。湯河原・城山山頂にて



「東京十名山」の1峰、港区芝・愛宕山の石段を登る

REPORT

フリーピン・ミンドロ島とミンダナオ島
未踏の沢登りに挑む

辺境クライミング隊長 小阪健一郎

ミンドロ島の未踏の険谷へ

《クライマーがほぼ行かないであろう辺境の離島、ミンドロ島に険谷らしき地形を地図上に発見した。標高は2000mほどの山だが、標高差のほぼ全てが大滝、連瀑、ゴルジュで形成されていそうな地形図だ。我々が日本で登ったことがある谷で言うと、剣沢大滝や称名滝を上回ような谷の可能性も大いにありそうだ。この未踏の険谷を登れるとしたら、世界広しと言



ミンドロ島の落差500mオーバーの大連瀑

えど沢登りの文化を育んできた我が国のクライマーだけだろう。ならば、我々が挑戦せずして誰が挑戦する。》

これは日本山岳会の海外登山助成金制度に応募した計画書の文言である。読み返してみても恥ずかしいほどの威勢だが、まさに剣沢大滝や称名滝に勝るとも劣らない総落差500mオーバーの大連瀑+ゴルジュが、沖縄本島よりも小さいフリーピン・ミンドロ島の標高2000mにも満たない山の密林にあつたのだ。

2024年

4月に挑戦、ほとんど手も足も出ず高巻きせざるを得なかったが、「ライトニング・フオー」と名付けた、稲妻のよ

うに分枝しながら流れ落ちる120mの最大大滝だけは登らせてもらえた。ほぼ源流まで遡行したところで時間切れ、帰国の日が迫っていた。隣の谷を下降する計画を変更し、地獄のヤブこぎで稜線を越えボロボロになりながら6日目に下山した。

沢登り中にいつの間にか「レプトスピラ」という細菌に感染し帰国後に発症して死にかけたが、今となつては山仲間にも医師仲間にもウケの良い武勇伝である。記録は“ROCK&SNOW”104号に書いたもので、ご覧あれ。

翌年の3月、芝浦工大で行なわれた日本山岳会の海外登山報告会に参加する機会に恵まれた。そのとき司会の萩原浩司氏によれば、海外の沢登りに対して日本山岳会から助成されるのは初めてのことだそう。人生の半分近くを沢登りに熱中してきた身としては、ありがたい言葉である。さらに報告会には天皇陛下のご臨席を賜った。まさか沢登りばかりしてきた人生で陛下に拝謁を賜る機会があるとは、誠に身に余る光栄である。これからは胸を張って沢登りを続けていこうと思う。

国内外の未踏の谷を求めて

かつて日本山岳会、中国登山協会、韓国山岳会の持ち回りで開催されていた日中韓3国学生交流登山に、2009年の第3回から3年連続で参加した。その第3回で中国の玉珠峰(6178m)に登らせてもらった。初めての高所登山だったが、出国までの3ヶ月間に高度順応として富士山を3度登り、山頂に4泊したことが功を奏したのか、幸運にも高山病になることなく順調に登頂できた。

玉珠峰はツアイダム砂漠の南縁を形成する崑崙山脈に位置し、濃い青空に映える白い三角形の美しい山だった。しかし、言い換えると砂漠の荒野にそびえる無機質な高峰で、一岳人として憧れていた高所登山ができて大満足だったが、草木が生い茂る瑞々しい日本の山に対する愛も一層深まった。瑞々しい山でやる水々しい登山といえは、やはり沢登りである。

それからというものの、日本の津々浦々で谷を巡ってきた。下級生のころはガイドブックに載っているような有名な谷を好んで登っていたが、やはり初登こそ山ヤの

本懐だ。上級生になり未踏のゴルジュや大滝に好みが移ってきた。

最近だと屋久島の羽神滝1000m(注1)、諏訪の瀬島の白水の滝283m(注2)、奄美大島のフーチブルの滝181m(注3)が自信作で、こんな離島にも大滝があったのかという意外性がたまらない。

未踏の谷を求めて海外にも行った。台湾に4回(注4)、インドネシア・スラウェシ島に2回(注5)いずれも学部生のときに行ったが、大学を卒業してからコロナ禍もあり随分時間が経ってしまった。

最近特に1日、1週間、1月、1年の時の流れが加速しているのを自覚し始めている。山は逃げないが時間は逃げる。行きたい所はす



豪快に落ちるミンダナオ島の二股大滝

ぐに行かねばならない。今こそフイリピンに行こう。近隣諸国だと台湾や韓国は日本人による沢登りの記録がたくさんあるが、どういうわけだか、フイリピンで沢登りをしたという話を聞いたことがない。これはチャンスだと前から思っていたのだ。

フイリピンの地形図といえど、少なくとも10年ほど前は旧ソ連製の、小縮尺なキリル文字の地形図くらいしか入手できなかった覚えがあるが、いつの間にかフイリピン政府の国家地理資源情報庁(NAMRIA)のホームページで、5万分の1の官製地形図のPDFがダウンロードできるようになっていた。地形図さえあれば、あとは

こつちのものだ。山があり
そんな島の地図を片っ端から見て、ヤバいのを発見したのが冒頭のシーンである。

ミンダナオ島の秘峰に着目
ヤバいの

ミンドロ島だけではなかった。ミンダナオ島の南東部の太平洋沿いにパシフィック・コルディレラ山脈が南北に走り、その中央にパンダグサーン山(Mt. Pandagasaan)が鎮座している。標高2670mにしてプロミネンス2580mを誇る、まさに山脈の主峰だ。フイリピンを代表すべき山だが、なんと一般登山道すら整備されていない。グーグル・マップの衛星画像を見るに、未開墾の密林が残っているようだ。まさに現代に残された秘峰だ。山の南面に目を移してみると、大岩壁を流れ落ちる推定落差400mの大滝がバッチリ写っているではないか。見てしまつたからには、登りに行かずにはいられまい。官製地形図には、岩壁にひと言Rockyとある。「ロッキ

ー・フォール」と名付け、これを今回の目標とした。

2025年3月、ミンダナオ島でメンバー3人が落ち合い、チャーターした車で行ける所まで行つてから重荷を背負つて最奥のポンボン村を目指した。適当な道端で野営し翌朝にポンボン村に到着すると、ほどなく大勢の村人に取り囲まれた。これより先は役場のパ

ーミッションが要るとかで門前払いだ。

ノーヘル・ピーサンの青年たちが運転するバイクにニケツさせてもらい、ガタガタ地面に浮き石ゴロゴロの激ヤバ林道を延々進むと30km、ケツが痛くなつてきたころにようやくニューバターン(New Bataan)の市街地にたどり着いた。マフラーに足を置いていたせいで沢足袋のフェルトが熱で溶けてしまった。早速、市役所を訪れて事情を話しても、「市内の山は全て閉山している」と取り付く島もない。ポンボン村の出張所に陳情に行くが、答えはノー。別の最奥の村のマヌリガオ村の出張所にも



ポンボン村で村人に取り囲まれる

行ってみるが、同様に答えはノー。どいつもこいつも話が分かる奴はいないのか。両村を含む西面から入山するのは諦めて、東面に回り込むことにした。

翌日、バスとバオバオ（3輪タクシー）を乗り継いで東海岸まで移動し、さらに翌日、トライシクル（サイドカー付きバイク・タクシ）とバイクで東面の最奥の村を目指した。結構な雨の中、ぬかるみも下り坂も見通し悪いカーブもガンガン飛ばすので肝が冷えたが、無事に最奥のパンライサン村に到



先に何があるのだろうか、とワクワクしながら歩く沢登りは、やはり楽しい

着した。

雨のせいか教会で日曜礼拝でもしているのか、村人がほとんどいない。誰に止められることもなく村を歩いて横切り、入山できてしまった。小さな谷を登り詰めた尾根にも小屋があり、こんな山奥にも人の気配があるのか。できたら人に会いたくない。人気を忍んで密林のヤブの中を歩き、霧が懸かる焼畑跡を走り抜け、誰にも会わずに大きな谷に入渓できた。入渓さえすればこちのものだ。谷をつないで溯下降して、ロッキ―・

フォールを目指せばいい。

懸垂下降をしながら谷を下降して適当に野営し、翌日、さらに下降すると二股に出た。今いる右股から左股に進みたいが、両股とも出合に立派な大滝を懸けている。尾根を越えて大高巻きしたはいいのもの、左股は遡行不可能な大ゴルジュだった。側壁を頑張つてトラバースするが、なかなか思うように前進できない。左股ゴルジュを迂回しようと側壁に懸かる連瀑を登ると、稜線近くでバナナ畑に

出てしまった。しかし、もうすぐ日が暮れるこんな山奥にそうそう人も来ないやろうと油断し、この日は適当な河原で野営することにした。

山岳部族に銃を突き付けられる

焚き火を熾していると、すごい剣幕の山岳部族3人が現われて大きな銃を突き付けられた。英語は一切通じない。両手を挙げて逆らう意思がないことをアピールするも、今にも発砲しそうだった。事態に現実感がなさ過ぎて恐怖を感じてなかったが、どういう訳か自分の脚はガクガク震えていた。後ろ手に縛られ、滑つて転げながら暗闇の沢道や泥道を延々歩かされ、小屋に連れ込まれた。小屋の中にも外にも大勢人が集まるなか、部族の代弁者からの取り調べが始まった。「なぜ山に登るのか」と聞かれても答えようがない。数時間の禅問答の末に、どういう訳か縄は解かれて警察に保護された。警官に「Now you are safe」と言われ、

そうやんな、safeやなかったやんな、と身に危険が迫っていたことを実感して鳥肌が立った。現に1年前には余所者が1人、この村で

この部族に殺されたそうだと。とくに日付が変わった真夜中に下界の警察署に到着し、敷地内の東屋で横になった。

もうコリゴリだったか、角田隊員は冴えない顔で予定より先にソルトレイクに帰ってしまった。全然登り足りない僕は、なんでもいから1本登りたかった。部族のいなさそうな山を探して懸命に大部隊員を説得し、沢登りに付き合ってもらった。結果的には滝やゴルジュは突破容易なものだったが、たとえ簡単であっても、この先何が出てくるのだろうかワクワクしながらする沢登りは、やはり楽しかった。さらには、南国の見たことない溪相や動植物も我々を楽しませてくれたのだった。

四方を部族の鉄壁に守られた秘峰が、ミンダナオ島にはあった。あの山のあの滝を、この目で拝める日は来るのだろうか。

注1: "ROCK&SNOW" 105号

注2: "ROCK&SNOW" 97号

注3: "ROCK&SNOW" 91号

注4: 鹿野溪『ワングル』2017年8月号

／大滝溪『山と溪谷』2011年9月号

注5: 「ヤクのあしあと」2024年号

*この登山は、日本山岳会の海外登山助成金を受けて実施されました。

REPORT

第13回小島烏水祭が開催される

四国支部 田所秀紀

第13回小島烏水祭が4月5日(土)、香川県高松市の峰山公園で開かれた。満開の桜の下、昼前にバーベキュー広場で若狭和雄会員の山仲間による讃岐うどんの接待から始まった。参加者はうどんをすすって腹ごしらえ。その後、はにわつこ広場に移動し、午後1時から小島烏水レリーフの石碑の前で碑前祭が行なわれた。

主管の尾野益大・四国支部長の挨拶で開会。主催者として日本山



峰山公園の烏水の碑前で講演する岡野眞さん

岳会の長島泰博常務理事が橋本しをり会長の代理で挨拶した。来賓の鎌田守恭・香川県議会議員、中林大典・高松市副市長、中村順一・高松市議会議員、尾上昇・日本山岳会第23代会長も挨拶した。

講演の講師は岡野眞さん。岡野金次郎の孫で、金次郎の三男満氏の長男。香川大学工学部教授を経て現在は群馬市民大学学長をされている。演題は「小島と岡野、公共は水の如し」。昨年発刊された『孤高に生きた登山家、岡野金次郎評伝』（山と溪谷社）を採り上げ、小島と岡野はライバル同士、どちらかと言えば小島によって岡野が「影の男」とされたが、交友記録や資料を読み解くと、ふたりはサラサラとした水の流れのような自然な関係で、互いに尊重し合い、ほど良い距離を保って交流していたと紹介した。

「ふたりには対照的な点も多く、それらが強調されてきたことも事実だが、互いに相違点を認め合って、さりげなく助け合っていたよ

うに思われる」と、ご子孫ならではの感性に基づくエピソードなど大変興味深い内容のお話だった。

代表者による献花を実施した後、参加者全員が「富士の山」「雪山讃歌」を合唱。藤井博会員による閉会の挨拶があり、最後に集合写真を撮影。碑前祭はつつがなく終了した。

午後5時30分から会場を喜代美山荘「花樹海」に移して懇親会を実施。改めて来賓の紹介と日本山岳会第24代会長の森武昭氏、引き継がれる山岳祭プロジェクト・リーダーの坂井広志氏から挨拶をいただき、四国支部自然保護委員会の石川慎吾委員長の音頭で乾杯となった。

歓談の途中、ゲストとして参加いただいた『孤高に生きた』の著者・鈴木遙さんが本の宣伝も兼ねて挨拶。余興では、四国支部広報委員の今井順一委員長が坂本九の「心の瞳」をアカペラで声高らかに歌い上げ、半年の練習の成果を披露した。

烏水の孫・相良泰子さんによるピアノ演奏「ショパンのワルツ」、曾孫の相良嘉洋さんによるヴァイオリン演奏「バッハのブルーレ」「ボ

ツケリーニのメヌエット」もあった。烏水の孫・南英敏さんを含む親族の皆さん全員を紹介し、烏水との思い出話も語っていただくなど、楽しく格調高い懇親会となった。最後に、参加者全員で滝廉太郎作曲の「花」を大合唱し、若狭和雄会員の中締めにて懇親会が終了した。

翌6日は、香川県の一大観光地である「こんぴらさん」参拝の山行を実施、森武昭元会長ら13人が参加した。参道から本宮を経由し奥の院まで参拝する健脚コースと、参道から本宮までのゆつたりコースに分かれて石段歩きを楽しむ。ゆつたりコースでは、うどん打ち体験として自分で打ったうどんが昼食代わりになった。体験した会場「中野うどん学校」では、盛り上げ上手なインストラクターによるうどん打ちが大変楽しかった、との参加者のコメントも聞かれた。

健脚コースでは、下山途中にある日本最古の歌舞伎小屋「金丸座」を見学、書院・宝物館での国の重要文化財も併せて鑑賞するなど、両コースとも充実感あふれる山旅となった。

(小島烏水祭担当役員)

REPORT

第15回登山教室指導者養成講習会を
小諸・安藤百福センターで開催

主催…(公社)日本山岳会 支部
事業委員会／後援…(公財)安藤ス
ポーツ・食文化振興財団

4月12日(土)

会場…安藤百福記念アウトドア
アクティビティセンター カンフ
アレックスホール

◆講義1「山岳遭難の実態と登
山のリスク」講師…岸本俊朗(長野
県警察山岳遭難救助隊)

◆講義2「雪山登山の基礎」

「雪山の楽しみ方とリスク」講師…
平川陽一郎(常務理事、山岳ガイ
ド)

4月13日(日)

車坂峠・黒斑山間で実技講習の
予定であったが、悪天のため登山
中止。センター室内で机上講座、ロ
ープワークなどの実技を実施。

講師…平川陽一郎(同前)

長野県小諸市において支部事業
委員会主催の登山教室指導者養成
講習会を開催した。本講習会は支
部の活性化と次期リーダーの育成
を推進するため計画されたものだ
が、今回で15回目の開催となる。安

藤財団の後援を受け、青森、群馬、
埼玉、東京多摩、神奈川、越後、山
梨、信濃、東海、京都滋賀、関西、
東九州の各支部から女性8名、男
性11名の19名が参加した。

日本山岳会の活性化・会員増強
の方策として支部山行が山歴の浅
い会員の定着化事業として注目さ
れ、また、非会員を対象とした登
山教室は新入会員の獲得に寄与す
るので実施する支部も増えており、
山行の増加に伴い遭難事故の危険
も増加している。山行の安全管理
に必要な知識と技術を持った指導
者の育成が求められており、指導
者の養成を目的として本講習会を
実施した。今回も後援をいただい
た安藤財団が所有・運営する安藤
百福センターで講習会を行ない、
宿泊した。

1日目の講義1では、近年の山
岳遭難事例を基に山岳遭難の特徴
が説明され、その原因の多くが人
的要因によるもので、装備や技量
体力が不足で、技量以上の山行で
の遭難が多い、と示された。

講義2では、雪山での基本知識
からリスク管理まで学んだ。夕食
後の懇親会では、支部間での情報
交換も活発に行なわれた。

2日目、現地まで行ったが雨天
強風のため、残念ながら実技講習
は中止。センターの室内で机上講
座、ロープワークなどの実技を行
ない、有意義な講習ができた。

講習会では引率登山での安全管
理について学習し、考える貴重な
機会を持つことができた。各支部
で安全登山に対する取り組みを行
なうきっかけとなり、支部山行や
登山教室が適切な安全管理の下で
行なわれることを願っている。

(支部事業委員会 中村哲也)

自分も勉強になった2日間

大滝 勝

講師アシスタントとして参加さ
せていただきました大滝 勝です。
私は山形県で兼業山岳ガイドをし
ておりますが、大学山岳部の先輩
である平川陽一郎講師にお誘いを
いただいたこと、私に関わるガイ
ド業界でも指導者育成が課題にな
っていることから、今回の登山教
室に参加させていただきました。
普段のガイド業務でも感じており



カンファレンスホールで講演する長野県警の岸本隊長

ますが、一定の動作を「自分ができ
ること」と、「人に分かりやすく、
理解してもらふこと」には大きな
隔たりがあります。

2日目の室内講習で、スリング
で簡易チェスト・ハーネスを結ぶ
「シートメント」の練習では、参加
者のみなさんもそのことを実感さ
れたのではないかと思います。ま
た、当初予定していた黒斑山での
実技登山に関しては、前日からス
タッフ・講師間で様々な状況を予
測しながら悪天に備えておりまし
た。当日の雨の状況を確認してか



平川講師(左)と大滝氏でツエルトの使い方のレクチャー

らのスタッフみなさんの対応、「なぜ実技を中止するのか」「中止して室内講習に振り替えることで、参加者にどのようなメリットがあるのか」など、参加者の立場に立つた説明、毅然とした対応、スタッフ間の情報共有の態勢などは、ガイド業に携わる私にとっても参考になりました。

登山教室全体を振り返りますと、参加者みなさんの経歴、経験には大きく幅があるように見受けられました。講師アシスタントという立場ながら、雪山の道具などは部位の説明から行なった方が良かったなどいろいろ考えておりましたが、平川講師の理路整然とした講義に

私自身も勉強になりました。特に「みなさんが連れて行った仲間は、みなさんが無事に連れて帰る」という言葉は、ガイドや一般登山者という立場を超えて肝に銘じておきたい言葉です。

1日目の懇親会では、多くの支部の方からお話を伺いました。各支部の様子から登山教室参加の動機に至るまで、山への想いが強く感じられ、日本山岳会という組織と人に、大いに魅力を感じたひとときでした。

今回は講師アシスタントという立場ながら、私にとっては逆に学びの多い2日間となりました。松田委員長はじめ講師のおふたり、そして、全国から参加された各支部のみなさんには、講師アシスタントという立場ではございますが、深く感謝を申し上げます。

(講師アシスタント)

有意義だった講習や支部交流

信濃支部 波田優美子

自分が連れて行った人は、自分が無事に連れて帰る。4月12・13日に安藤百福アウトドアアクティビティセンターで「第15回登山教室指導者養成講習会」が開催され

たが、講習会のメインテーマはまさにこれ、と考える。

講習1日目、前半は長野県警察山岳遭難救助隊・岸本隊長から「山岳遭難の実態と登山のリスク」について講義を受ける。近年の遭難は、体力不足や事前のリサーチ不足など事前準備に起因するものが多く、40代、50代の割合が高く、普段運動をしていますかと尋ねると、ウォーキング程度や何もしていない人が多いとのこと。

後半は平川理事から雪山登山の基本、楽しみ方の講義を受ける。雪山ギアの考え方や食べることで、飲むことの大事さを改めて認識できる内容であった。ギアについては、「TPOに合ったものを使う。濡らさない、飛ばさない、なくさない、壊さない」ことが基本。道具は、実際に自分で使ってみること。「理論が変われば道具が変わり、技術が備わる」と。また、食べ物飲み物も非常に大切であること。「酸っぱい、甘い、しょっぱい」ものを食べる。食べないことでエネルギー不足となってしまう。

夜はお楽しみの懇親会。北は青森、南は大方から講習会に参加している。JACの講習会の良いところ

ころは、全国の方とお話ができること。今回、会場となった安藤百福センターのセンター長・中村達さんともお話ができ、素敵な時間を過ごすことができた。

講習2日目、実地講習の予定。昨夜から生憎の雨。バスで現地向かうも雨で雪はベチャベチャ。講習向きではない雪質と雨のため実地講習は難しいと判断され、安藤百福センターに戻り、机上講習。午前は、ロープワークおよびツエルトの張り方を習い、午後は、平川理事が埼玉支部の「山塾」で使用している資料を拝見する。山行中は、コミュニケーションをとり、同行者の変化に気づくこと。万が一の事態が起きたときの対処法などをお伺いする。

指導者養成講習会と名が付いているけれど、指導者を目指していない方にもぜひ、山に登る者としての嗜として受講していただきたい内容だった。講習会の内容もすばらしいものであったし、参加者も様々な地域から集まっているので意見交換も行なうことができ、本当に有意義な時間が過ごせた。主催者並びに参加者のみなさん、ありがとうございました。

連載■文庫本でも楽しめる

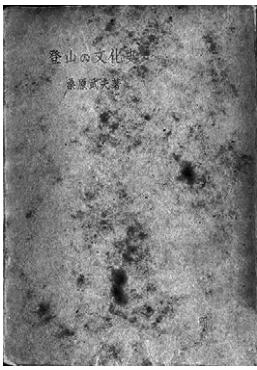
山の名著再読

(41)『登山の文化史』(桑原武夫著・岡書院)

飯田年穂

まず著者の桑原武夫を紹介しておこう。明治37(1904)年生まれ、父は京都帝国大学教授、自らも京都帝大で学ぶ。京都大学教授となり、京大人文科学研究所の所長も務めた。専攻はフランス文学で、ルソーなどフランス啓蒙思想を研究。人文研の共同研究による『フランス百科全書の研究』、『ルソー研究』などを世に出した。文芸評論家としても活躍し、京都が輩出した有力な文化人のひとり。文化勲章受章。昭和63(1988)年没。

旧制三高在学中から西堀榮三郎や今西錦司らとともに登山に親しみ、京大文学士山岳会(AACK)の結



昭和25(1950)年初版発行

成メンバーに加わった(第3代会長)。1958年、チョゴリザ登山隊を率いて初登頂を果たしている。

こうして見るとなかなかの山歴だが、それにしては登山家として知られていないのは、学術・文化面での活動が華々しかったためだろうか。本書の「あとがき」では、「私の登山はかなり古い。そして得がたき岳友の多くに恵まれていたにもかかわらず、私の登山は大成しなかった」と自白している。

本書は、1944年に刊行された『回想の山山』に増補・加筆が施され、『登山の文化史』と改題されて50年に岡書院から出版された。表題となった『登山の文化史』をはじめ、随想と紀行が13篇、翻訳が2篇収められている。

表題作は登山を文化的な行為と捉えて、古今東西の山岳観や、山と人間との関わりを文化の視点から概観したものだ。42年の山岳講座で

の講演を基にしているが、当時としては登山を文化と関連づける視点は斬新だった。それまで「かかる種類の日本語文献は皆無であるように思う」と著者自身は述べている。

桑原の仕事全般を通して思うのは、目の付け所の良さだろう。時代の先を見越した発想のユニークさが本領と言える。ただ、自身は特に一つのテーマを深く突き詰めることはしなかった。それよりも多彩な領域にわたって旧弊に囚われず、来るべき将来の可能性を準備した人だったことに意義がある。

本書を読んでいると、確かに示唆に富んでいるところがいろいろあつて、思いがけない気づきがあるはずだ。山に関してならば、「日本の山はすでに便利になりすぎている」、「案内記にあることを実地に確かめてみる、これほどばからしい旅行の仕方があるだろうか」と、90年も前に言われては返す言葉がない。

山岳紀行文を書くなら、記録の時代は終わったから、以後は文学としての紀行文になるべきだ、と指摘する。ならば、その「紀行文にはスタイルがなくてはならない」が、「この場合スタイルというのは決して表面的な修辞学的意味においてでは

ない。登山家に独特の登り方があり、それが文字にあらわれたところを言うのである」。紀行文の前提として登り方に独創的な個性を求めているわけで、登山の流儀を「スタイル」というハイカラな言葉にしたところが桑原らしい。

紀行の翻訳を入れたのも、日本にはまだスタイルのそなわった登山もその紀行文もないとの自覚があったからだ。訳文の著者デュ・モンセルは、先鋭的なクライマーの結集する「グループ・ド・オート・モンターニュ(GHM)」の会長にもなったアルピニストで、紀行文のお手本だと考えたのだろう。

今の私たちの登山では、ガイドブック(もはやインターネット情報と言うべきか)を頼りに、そのとおりに登山することが安全登山だと教えられてはいないか。桑原の考え方は、古い時代の想い出だと分かっているにしても、それでも新鮮な驚きを感じさせてくれる何かがある。そんなところが、現代の読者にも勧めたくなるゆえんだらう。

新潮文庫(1955年初版発行)や平凡社ライブラリー(1997年初版発行)に収録されている。

(図書委員会委員)

④『黒部谿谷』（冠松次郎著・アルス）

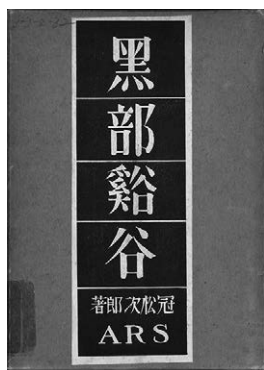
節田重節

《剣岳、立山、双六谷、黒部／あんな大きい奴を友だちにしてゐる冠松／あんな大きい奴がよつてたかつて言ふのだ／冠松くらゐおれを知つてゐる男はないと言ふのだ／あんな巨大な奴の懷中で／粉ダイヤの星の下で／冠松は軒をかい

て野営するのだ。》（室生犀星「冠松次郎氏における詩」部分）

詩人が讃えたように、冠松次郎（1883～1970）は身代と生涯を賭して黒部谿谷の全貌を明らかにし、「黒部の父」とも呼ばれたパイオニアである。

日本山岳会の創立と前後して日本アルプスは探検時代を迎え、主な稜線ルートが次々に踏破されていった。そのような時代にあつて「谷渉りの山旅」に着目、一分野を確立していったのが冠松である。



昭和3（1928）年初版発行

明治44（1911）年夏、白馬岳から祖母谷へ下つて冠松は初めて黒部谿谷と邂逅する。6年後の7月、早月尾根を初登攀して剣岳に登頂後、立山頂上から黒部川を俯瞰してその虜となつていった。

黒部に魅せられた冠松は大正7（1918）年以降、すさまじい執念で黒部川とその周辺を渉猟する。それらの記録・紀行の一部をまとめて昭和3（1928）年、処女出版されたのが『黒部谿谷』である。本文には「黒部川の概観」に始まり、「下廊下の記」「双六谷から黒部川へ（一）、双六谷を遡る（二）、黒部川を下る」「黒部川遡行記」「紅葉と新雪の黒部流域」「春の黒部川」「赤牛岳へ登る」「有峰のこと」などの項目が並ぶ。

本書のハイライトは、なんと言つても「黒部川遡行記」の中の、自ら命名した下廊下・十字峡との出会いシーンだろう。大正14（1925）年8月、冠松と沼井鉄太郎・岩永信雄の一行は名案内人・宇治長次郎を伴つて鐘釣温泉からシアヒ（志合）谷出合、東谷出合、作郎越

を経ていよいよ棒小屋沢・剣沢の出合に到達する。

「私等はこの上に立つて暫くの間は言葉も交へず、黒部川によつて現示された自然の光耀に陶然として酔つてしまつた。やがて三人握手を交はし、この壯觀を共にしたのを喜んだ。ア、その時！ 友の眼は潤ひ光つてゐたのではないか。」と綴っている。

私も黒部川本流と剣沢落ち口の右岸が形成する小平地で、「粉ダイヤの星の下」ビバークしたことがあるが、黒四ダムで本流の水量が減つてゐるとはいえ、往時と変わらぬ、大自然が示してくれる偉觀に感激した思い出がある。

もう一本の柱である双六谷は、神通川・高原川（たかはら）の支流である金木戸川の支谷で、冠松が好きな谷の一つ。大正13（1924）年8月、薬師岳にその名を残す宮本金作を案内人に、高原川畔の見座から金木戸川に入る。広河原から小倉谷出合、打込谷出合、下抜戸、奥抜戸を経て蓮華谷に入り、九郎右衛門谷を遡上して黒部乗越に上がり、さらに五郎沢を下つて黒部川に降り立ち、上廊下上部を下降して赤牛岳に登り、東沢出合から平の小

屋に出て山旅を終えている。その紀行の中に、私にとつて強く印象に残つた記述がある。

「黒部乗越！ 私はこんな暢気な緩やかな上りを、尾根のしかも美しい草の平に出たことははじめてであつた。金木戸の人の話ではないが双六谷の岩魚が黒部の谷へ通いそうなどところだと思つた。」（朋文堂コマクサ叢書『続 黒部谿谷』より）。この一文に憧れて、そつくりそのままの行程をたどり、岩魚になつた気分で黒部乗越を越えて五郎沢を下降、赤木沢を遡つて黒部五郎岳を越え、乗越に戻つたところがある。私の永年の山行の中でも、会心の山旅と言えるだろう。

冠松は本書の発刊以降、30冊以上の著書を著わしているが、最晩年の昭和42（1967）～44年、60年にわたる登山紀行と隨筆を再編して、全5巻の『山溪記』（春秋社）を刊行している。最近、その中から初遡行や初登攀の記録を中心に編年で収録したヤマケイ文庫クラシックス『新編 山溪記 紀行集』（2023年初版発行、税込み2640円）が発刊されたので、偉大な冠松の足跡の一端をたどることができる。

（図書委員会委員）

REPORT

「体力確認ハイキング」を
丹沢山地南部の高松山で実施

医療委員会担当理事 原田智紀

2025年3月30日(日)に、医療委員会主催登山イベントとして、「体力確認ハイキング」を行ないました。

内容は1時間で登った標高差を記録し、運動強度がどの程度か確認するというものです。運動強度の単位はメッツ (METs: Metabolic Equivalents) と言います。1メッツが安静時(座って安静にしている状態)の運動強度で、具体的には1分間に体内に取り込まれる酸素の量(酸素摂取量)が3・

5 ml/kgの状態です。運動強度を高めると、より多くの酸素を必要とし、日常生活は3・3・5メッツになります。

山本正嘉先生(鹿屋体育大学名誉教授)らにより、登山のメッツ表が作成され、ザック重量(正しくは衣服や登山靴の重さも含めたもの)と1時間での登行高度差からメッツが分かるようになりました。ザック重量が体重の10%で、1時間に350m登ると6メッツです。山選びは、登りの途中に下りが



植林帯の登山道を登る参加者



高松山山頂での参加者の集合写真

なく、6メッツ1時間の運動を2回繰り返せるように、700m以上の標高差があり、混雑していないコースであることを条件にしました。地理院地図とにらめっこし、下見も行ない、神奈川県山北町の高松山(801m)に決めました。

2月12日に日本山岳会のホームページ、Instagram、Xに掲載してもらい、2月中に5名の申し込みがありました。さらに会報「山」での案内やヤマケイ・オンラインへの配信により、3月上旬までに39名の申し込みがあり、定員の15名をあとという間に超えてしまいました。無料イベントであったためか、会員外の方の応募がとても多かったです。定員より多い18名の方を参加予定とさせていただき、定員外となった方には、個別にお断りメールをお送りしました。

開催数日前に、具体的な方法も記載した計画書をお送りしたところ、3名のキャンセルがあり、当日は日本山岳会会員・準会員6名、会員外9名を迎えました。

ザック重量は当日朝に測ってきただけで、大抵は体重の10%程度でした。私は有事に備えるための装備も持っており、20%になっ

ていました。

標高の確認に、スマートフォンで電波が届かなくても現在地を確認できるジオグラフィカなどの登山アプリを用い、時間の管理に時計アプリのアラーム機能を用いました。行動時間1時間と休憩時間10分を守って登山し、アラーム鳴動時の標高をスクリーン・ショットで保存していただきました。山本先生より、競争になると余裕で登れる運動強度が分からなくなる、とのアドバイスをいただいていたので、私を追い抜かないようにもしていただきました。

結果は先頭付近の方が6・9メッツ、最後尾の方が5・4メッツでした。体力のない方の応募が多いのかと思いましたが、体力がある方が興味を抱くイベントだったようです。しっかりとっている方ほど心配してくれるのかもしれませんが。歩き方のアドバイスもさせていただく予定でしたが、橋本しをり委員長、柏澄子委員、中村仁委員と私の4名のスタッフと、登山者ではない私の家族2名では、十分な対応時間を確保できませんでした。

この企画は今後も開催予定です。

N

東 西 南 北

S

山を歩いて感動すること

広渡 敬雄

山歩きで得られるものは、その大きな自然力のエキスを身体一杯に感じとり、吸収して自身の生きる力にすることだろう。

山は、標高差、火山歴などでそれぞれ異なる山容を持つ。低山ならば、樹木物質や微かな香りを身体に浴びて、森林浴とも言えるセラピー効果を得られ、高山であれば、様々な樹相（落葉松、山毛櫸、水槇など）を過ぎて、這松帯、お花畑に達した後に、山頂で雄大な展望を楽しむ。

真清水やわれ一本の山毛櫸となり（白神岳）

みずならは綿虫の来る淋しい木

（多摩川源流）

這松の大海原や星鴉（乗鞍岳）

最小の樹木チングルマや高山植

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

物を愛で、雷鳥、星鴉や羚羊、鹿、キタキツネ、啼兔に出会う感動。自身を自然界の中の一員として、もっと言えば自然界でほかの動物とともに生存する同じ視点で、自然に対することである。

雷鳥の砂浴びの窪あたたかし
（上越・火打山）

流れつつ渡る雌鹿や雪解川（大井川上流）

山を人と対峙する存在とし、それを征服するという欧州人と異なり、日本では古くから山は神が宿るとされ、信仰の対象でもあった。富士山、穂高岳、鳥海山、男体山、木曽御嶽山、白山などの高山に限らず、人々の暮らす里山も同様に神が祀られ、文字どおり山という自然と一体となって暮らす国民性である。

先年制定された「山の日は、山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する趣旨の祝日である。

令和7年度（前期）

「海外登山助成対象登山計画」募集

公益社団法人日本山岳会では登山界の活性化を目指し、優れた海外登山計画に対して「海外登山基金」による助成を行なっています。困難を求めている挑戦、オリジナルな発想、斬新な切り口、独自のテーマのある計画など、ユニークな登山計画を支援したいと考えています。

会員資格やパーテイ編成などの条件は問いません。ぜひご応募ください。

● 報告と記録掲載

助成対象となった登山隊は下山後、報告書を提出してください。また、会報「山」や機関誌『山岳』に掲載する記事執筆や、報告会への出席にもご協力ください。

● 問合せ・申込み先

日本山岳会事務局／海外登山助成委員会

① 所定の様式をJAC事務局にご請求ください。
② 記入後、登山計画書と併せてメールもしくは郵便でお送りください。

* 登山計画書には対象となる

山名、標高、位置、行程、メンバーの基本情報（氏名、連絡先、登山歴などのプロフィール）、予算など登山計画に必要な事項を網羅してください。

● 申込み締切

2025年6月20日（メール／必着、郵送／当日消印有効）

● 審査 2025年7月中旬に審査後、理事会で助成の可否を決定します。

下山後、報告書を提出してください。また、会報「山」や機関誌『山岳』に掲載する記事執筆や、報告会への出席にもご協力ください。

● 問合せ・申込み先

日本山岳会事務局／海外登山助成委員会

（月・火・木10時～、水・金13時～、第1・3・5土10時～）

☎ 03・3261・4433

✉ jac-room@jac.or.jp

〒102・0081 東京都千代田区四番町5番4 サンビ

ューハイツ四番町
（海外登山助成委員会）

第27回「秩父宮記念山岳賞」の 推薦募集について

秩父宮記念山岳賞審査委員会

第27回「秩父宮記念山岳賞」の推薦（他薦に限る）を次のとおり受け付けます。事務局まで資料をご請求ください。本会のホームページを活用される方は、推薦募集の詳細を掲載しておりますので、推薦要項・所定様式（ダウンロード可能）などをご参照ください。多数のご推薦をお待ちしております。

なお、本賞は公益目的事業でありますから、受賞対象者を本会会員またはグループに限定していません。

◎対象分野 登山活動／山岳に関する文化的活動、学術的業績

◎提出先 〒102-0081 東京都千代田区四番町5番4 公益社団法人 日本山岳会
内事務局 秩父宮記念山岳賞事務局 ☎03-3261-4433

✉jac-room@jac.or.jp

◎締 切 令和7年8月30日（土）

天文的には霧や雲海や御来光は遭遇しやすく、運が良ければ、高山の御来迎（ブロッケン現象）、尾瀬の白虹、雲海の影富士（海上の影鳥海）など、息を呑む光景にも出会える。

耳朶に触れし霧より霧雨に（飯

豊山）

再びは来ぬ頂や御来迎（蝶ヶ岳）

御来迎彼の世の我に手を振りぬ

（槍ヶ岳）

星飛びし空に影富士生まれけり

（富士山道）

低山でも樹林帯では、春の芽吹き（山笑ふ）、夏の青葉（山滴る）、

秋の紅葉黄葉（山装う）、冬の落葉（山眠る）が四季にわたり楽しめる。

登高やなほ高き峰子に示し（高尾山）

——世界で最も登山者の多い東京郊外高尾山。また、山歩きの中で見かける巣箱、泉、山葵田、上湖、遭難碑、ケルンなども句材になる。

山の俳句には、次の3つがある。

①遠望俳句（はるか遠くより眺め、名峰を詠む）……（駒ヶ嶽凍て

て巖を落しけり 前田普羅）

（芋の露連山影を正しうす 飯

田蛇笏）

②高原俳句（高原などを追遙しつ

つ自然界と山を詠む）……（啄

木鳥や落葉をいそぐ牧の木々

水原秋櫻子）（とりかぶと霧の

奔流湖に消ゆ 堀口星眠）

③登攀俳句（本格的登山俳句）……

（雲海の音なき怒濤尾根を越す

福田蓼汀）（雪溪の水汲みに

出る星の中 岡田日郎）

山に登る人のバイブルとも言え

る『日本百名山』の著者である深田

久彌は、「九山」の俳号を持つ俳人

でもあった。

俳人であれば、山を歩いて得た

感動を句に残すべきだろう。それ

は、最近極めて少なくなつた「自然

詠」の復活につながるに違いない。

五十年強の山歴で経験した結論

は、自然は心を静めてくれる。我々

俳人が山を歩いて得た感動を詠う

ことが、森の景観と野生動物保護

や水源確保、土砂崩れや地球温暖

化防止を通して、大切な自然を守

り、それを子孫に末永く伝える確

かな一助になると信じる。

活動報告

緑爽会

名山の国際化今昔物語

——日本の山に登る外国人登山家の現在・過去・未来——

緑爽会では、去る3月29日にルーム104号で『日本百名山』を英訳されたマーティン・フッドさんの講演会を開催した。

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。

標題ですぐ思い浮かべるのはウエストンであるが、明治以降、大正、昭和の時代から現在に至るまで、どんな外国人登山家が日本の山に登って、どんな活動をしていたのかは意外に知られていないのではないだろうか。今回の講演では、1860年に富士山に登つたオルコックを始め、なじみの薄い

登山家や学者についての登山や著書の紹介と、日本の山に登る外国人の時代ごとの状況を整理し、ユーモアを交えて語っていただいた。

オルコックの富士登山の際には植物学者ジョン・ヴィーチも同行しており、彼は富士山でシラビソを発見している。オルコックの愛犬トビーも一緒だったが、トビーは熱海で間欠泉の噴出により死んでしまったというエピソードも話された。その6年後にはスイスの外交官ブレンワルトが外国人として2度目の富士登山を率いた。さらに、ロシアの植物学者カール・ヨハン・マキシモヴィッチは北海道から九州まで歩き、雲仙・阿蘇・九重の山にも登って植物標本を本国に送った。

アーネスト・サトウは幅広く本州の山に登ったが、彼が日本の登山界に貢献したことは、武田久吉の父だったこと、もう一つは1881年発行のマレーの『日本旅行ハンドブック』の編集に協力したこと。ウェストンもこのガイドブックを使用している。

日本山岳会の創立以降、大正時代は国内の登山が活発になり、海外遠征も始まった。当時は、女性

も含め、外国人のJACC会員がいた。神戸ではMGK(神戸のマウンテン・ゴーツ)が創立され、機関誌『Inaka』を発行するなど独自の活動を行っていた。一方、そうした山岳会に所属しない一匹狼もいた。オールド・リーズは1922年に冬期富士登頂を果たした。また、人類学者のフレデリック・スターは曾我部一光という人物に富士山を案内してもらっていた。曾我部は富士山を愛し、富士山研究をまとめるつもりだったが、原稿は関東大震災で消失し曾我部本人も亡くなってしまい、多くの謎を残している。

関東大震災は一つの分岐点で、その後、外国人登山家の書いたものは1934年ウォルトンの書いた『日本と台湾の登山』以外見つけるのは難しく、日本にいる外国人の登山活動が減少した時代となった。小島烏水も「登山に関心を持つ外国人居住者は減少している」と書いている。その後、日本は1950年代から60年代にいわゆるマナスル・ブームを迎えるが、この数十年間に日本の山について書かれたものは見つからない。

日本の山に対する関心が再び高

山研「利用要領」の一部改正について

会報4月号でご案内しましたが、山研の「利用要領」の主な改正部分をお知らせします。

- (1) 15人以上の団体予約の場合、これまで利用日の10日前までに申込み金(10000円×人数)をいただいておりますが、これを廃止しました。
- (2) 複数組が同泊するときは、管理人が部屋割りを調整しますのでご協力ください。
- (3) 利用料金とは別に、これまで施設維持協力金(500円)

をいただいておりますが、皆様の要望もあり、これを利用料金に含めることにしました。ご理解ください。

- (4) 寝具の出し入れは管理人が行ないますので、ご協力ください。

なお、諸物価高騰の折、提供しておりますご飯を300円、味噌汁を200円、ビールを400円に、それぞれ値上げさせていただきます。併せてご理解ください。

(山岳研究所運営委員会)

いとフッドさんは言う。

まったのは、79年に井上靖の『氷壁』をドイツ語に訳したベンルからで、88年には、地質学者ハントが新しい英語のガイドブックを著わした。その中で、東京にあるIACC(インターナショナル・アドベンチャー・クラブ)などの山岳関連団体について言及している、平成の初めのころ、IACCを通じて外国人登山家が集まった(フッドさんもそのひとりだった)。しかし、現在そうした日本人と外国人が混在する登山クラブは見られない

その変化の要因はインターネットとソーシャル・メディアで、今やオンラインで情報が手に入り、登山情報のウェブサイトもできていくからだ。もう一つの大きな変化は、外国人にも日本百名山のブームが起こったことで、百名山の情報源にウエズ・ラングの「ハイキング・イン・ジャパン」というウェブサイトがある。彼は、2001年に英語で百名山を初めて紹介したロンリープラネットの

寄附金および助成金などの
受入報告(2月まで)

寄附者など	受入金額など (単位:千円)	寄附の目的、その他
鈴木 利英子 会員	30	日本山岳会編集委員会 へ寄附



『Hiking in Japan』が絶版になったことで、友人トム・フェイとともに、日本アルプスと富士山のガイドブックを出版した。それが未来につながるだろう。

日本の山に登る外国人登山者は、今後どんな活動をしていくのか、見守りたいと思う、と講演を締めくくられた。

(緑爽会 荒井正人)

会
務
報
告

令和7年度第1回(4月度)理事会

議事録

日時 令和7年4月10日(木) 19時
00分〜21時15分

場所 集会室およびオンライン
(zoom)

【出席者】

橋本会長、永田・桐生・

飯田各副会長、長島・南久

松・平川各常務理事、松田・

川瀬・望月・原田・猿渡・

久保田各理事、石川・清登

各監事

【欠席者】池田理事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・自然保護委員会の山岳写真デ

ィタベース公開の件(久保田・桐

生)(賛成13、反対0)

2・令和7年山研使用人雇用通知

書承認の件(長島)(賛成13、反対

0)

【協議事項】

1・令和7年度事業報告(総務・財
務)取りまとめについて協議した
(長島)

2・次年度の役員候補と外部理事
監事について協議した(長島)

3・海外登山報告会の芝浦工大か

らの請求および今後の会場選定に

ついて協議した(永田)

4・「山の日」に関する山岳4団体

の会議結果について協議した(橋

本)

5・評議員懇談会(4月23日実施)

について協議した(長島)

6・ハラスメントに関するレクチ

ャーについて協議した(望月)

7・事務局長の業務について協議

した(長島)

【報告事項】

1・入会者承認報告について(橋
本)

2・新永年会員について(長島)

3・2024年度未会費滞納除籍
予定者について(長島)

4・山研利用要領の改正について
(長島)

5・創立120周年記念式典につ
いて(桐生・長島)

6・委員会・支部からの事業計画
提出状況と未実施支部へのヒアリ

ングについて(長島)

7・会報の電子データでの受け取
りに関する回答結果と今後の対応
について(長島)

8・2025年全国自然保護大会
開催について(桐生)

【その他】

1・「山」4月号の進行状況につ
いて(節田)

ルーム日誌 4月

1日 広報委員会 スケッチクラ

ブ

2日 YOUTH CLUB委員

会 山行クラブ

3日 常務理事会 YOUTH

CLUB委員会 山岳地理

クラブ 紫蘭会

4日 入会説明会

5日 記念事業委員会(コーカサ

スの桜

7日	記念事業委員会（山岳古道調査）
8日	フォトクラブ
9日	かつばの会 山想クラブ
10日	理事会 みちのり山の会
11日	記念事業委員会（国際交流） 図書委員会 東京支部準備会
14日	アルパインスキークラブ
15日	麗山会 バックカントリークラブ
16日	募金委員会 三水会
17日	科学委員会 緑爽会 山遊会
18日	自然保護委員会 クニ塾
19日	アルビニズムクラブ
21日	総務委員会 アルパインスキークラブ（幹事会）
23日	評議員懇談会 子どもと登山委員会
24日	記念事業委員会（グレート・ヒマラヤ・トラバース）
25日	学生部 緑爽会 創立120周年記念事業委員会 資料映像委員会
30日	子どもと登山委員会 4月来室者 331名

会員異動

物故

菅原省司(5798)	25・3・27
山川 博(10403)	25・4・11
近藤 宏(11480)	25・3・18
志摩 茂(12239)	25・1・20
伊藤久次郎(13499)	25・4・2
曾根芳樹(13797)	25・4・6
退会	
伊藤尊仁(9206)	福島
服部敬二(9973)	宮崎
清水紀亨(10551)	
越野恵子(11950)	福井
谷口義宗(12681)	山陰
新井眞一(13598)	
中野八千代(13769)	東海
近藤節朗(14776)	東京多摩
土居義信(15036)	広島
西村しのぶ(15097)	静岡
木原建夫(15127)	広島
伊藤秀輔(15325)	広島
国枝宗央(15863)	東海
佐藤久夫(16062)	四国
福島端流(16373)	
渡邊泰子(16555)	埼玉
清瀬博昭(10436)	北海道
白川まり(10450)	東京多摩
岩本征士(10532)	東京多摩
西尾敏江(10537)	東京多摩

INFORMATION

インフォメーション

◆東山一勇気 きりえ個展

切り絵歴46年。冬山、マッターホルン、ツールドモンブランなどを展示。また、立石（関東ふれあいの道）、ジャンダルムの天使、裏磐梯スキー、コマクサなどの作品も展示します。

日時 8月25日(月)～31日(日)10時30分～17時30分（初日は13時から最終日15時まで）
場所 ギャラリーくぼた本館（4階）〒104・0031
中央区京橋2・7・11

[http://www.gallery-](http://www.gallery-kubota.co.jp/)

[kubota.co.jp/](http://www.gallery-kubota.co.jp/)

問合せ 東山一勇気 ☎0467・44・5532

✉ higashiyama@now.mfnet.ne.jp

訂正

＊会報4月号(959号)16ページ「創立120周年記念式典へ海外友好団体招請募集について」の3・

招請条件中、①国内滞在費(宿泊2泊分と歓迎会・晩餐会費用)を半額程度負担とありますが、全額負担に変更させていただきます。ご配慮のほど、よろしくお願いいたします。

（120周年記念実行委員会 国際交流プロジェクト・桐生恒治）
＊会報4月号2ページ、2段目の後ろから8行目、「小坂健一郎さん」とあるのは「小阪さん」の間違いでした。お詫びして訂正させていただきます。

（会報編集委員会）



図書受入報告(2025年3月～4月)

著 者	書 名	頁／サイズ	発 行 者	発行年	寄贈／購入別
ロバート・マクファーレン／ 東辻賢治郎 訳	クライミング・マインド：山への情熱の歴史	368p／19cm	筑摩書房	2025	出版社寄贈
山森英輔／有元優喜	異形のヒグマ：OSO18を創り出したもの	256p／20cm	講談社	2025	出版社寄贈
北大山の会チベットの調査 隊 編著	チベット紀行：トランスヒマラヤを巡る	241p／21cm	いりす	2025	著者寄贈
黒川伸一 編著／『北海 道の脊梁 日高山脈』編 集委員会 編	北海道の脊梁 日高山脈：日高山脈襟裳十勝国立公園 誕生	192p／28cm	共同文化社	2025	出版社寄贈
野村良太	「幸せ」を背負って：積雪期単独北海道分水嶺縦断記	216p／19cm	山と溪谷社	2024	出版社寄贈
小林泰彦	続日本百低山／ヤマケイ文庫	608p／15cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
樋口明雄	宇宙に願いを／ヤマケイ文庫	256p／15cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
遠藤ケイ	こども遊び大全／ヤマケイ文庫	416p／15cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
山と溪谷社 編	駅からハイク：電車に乗ってぶらっと山へ！駅から登れる関 東近郊の低山90	208p／21cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
渡邊明博	絶景の富士山絶景ハイキング：2時間で楽しめる！	144p／21cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
ROCK&SNOW 編／中 根穂高 監修	インドアボルダリング練習帖	96p／26cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
やまとけいこ	黒部源流 山小屋料理人	160p／19cm	山と溪谷社	2025	出版社寄贈
静岡県富士山世界遺産 センター／裾野市／御殿 場市 編	富士山巡礼路調査報告書：須山口登山道・御殿場口登 山道	350p／30cm	静岡県富士山世界遺 産センター	2025	発行者寄贈
八嶋寛	みやぎ百盟山：宮城県と周辺の山物語 おくの細道、震災 遺構と伝承館	88p／30cm	東北アウトドア情報セン ター	2025	発行者寄贈
溝手康史	登山道の法律 Q&A：登山道に関して生じる法律問題の 解説	82p／21cm	デザインエッグ株式会社	2025	著者寄贈
桜門山岳会 編	山岳部百年誌：1924-2024	248p／27cm	日本大学山岳部・桜門 山岳会	2024	発行者寄贈
三峰山岳会 編	岩つばめ：90周年記念誌	91p／26cm	三峰山岳会	2025	発行者寄贈
八尾正治	石崎光瑤：絢爛の花鳥画	65p／26cm	福光美術館	1995	個人寄贈
Mirella Tenderini	Gary Hemming (ハングル版)	304p／21cm	Haroojae Club	2024	発行者寄贈
Joe Simpson	TOUCHING THE VOID (ハングル版)	328p／21cm	Haroojae Club	2024	発行者寄贈
Bernadette McDonald	Alpine Rising (ハングル版)	416p／24cm	Haroojae Club	2025	発行者寄贈
Tatsuo Iiyama	北朝鮮の山 (ハングル版)	312p／29cm	Haroojae Club	2023	発行者寄贈
Kazuya Hiraide	What's Next? (ハングル版)	384p／22cm	Haroojae Club	2024	発行者寄贈
Yasushi Yamanoi	CHRONICLE：山野井泰史 全記録 (ハングル版)	392p／24cm	Haroojae Club	2023	発行者寄贈
Steve Roper	CAMP4 (ハングル版)	460p／24cm	Haroojae Club	2023	発行者寄贈
今西錦司	千五百山のしおり(1986)	61p／21cm	今西錦司(私家版)	1986	個人寄贈
田辺和雄	原色高山植物	19cm	朋文堂	1960	個人寄贈

◆編集後記◆

●4月30日の毎日新聞夕刊を開いたとき「マッキンリーから学んだトランプ氏」という大見出しにちよつとびっくり。もちろんアラスカのデナリではなく、第25代合衆国大統領W・マッキンリーのことでした。25代を尊敬しているMAG Aおじさんは、山名もマッキンリーに戻すよう命令しています。

●改名騒動があったとき、某テレビ局から取材があり「今回の改名について、植村直己さんならどう考えられるでしょうか」との質問。いくら山岳部の1年後輩でも、植村さんの心の中までは分かりませんが、「現地の人々との交流を大切にしていた植村さんですから、ネイティブの名前『デナリ』を尊重したい、と言うと思います……」と答えておきました。(節田重彰)

日本山岳会会報 山 960号

2025年(令和7年)5月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 橋本しをり
編集人 節田重彰
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社